



Title	、心道の教祖熊崎健翁の人生史：その思想形成と活動の変遷
Author(s)	下村，育世；石川，偉子
Citation	一橋社会科学，2：16-24
Issue Date	2010-07-30
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/18620
Right	

「要旨」

、心道の教祖熊崎健翁の人生史

―その思想形成と活動の変遷

下村 育世
石川 偉子

熊崎健翁（一八八一―一九六一）は昭和三年に運命学（占い）の鑑定所「五聖閣」を設立し、「熊崎式姓名学」で一世を風靡した後、心道（現在は、心會と改称）を開教、宗教家としての道を歩んだ。五聖閣設立以降の後半生に対し、四六歳までの熊崎は、独学で「熊崎式速記術」を完成し、それを活かして時事新報などの新聞社で勤務するという、時代の最先端をいく近代主義者と見える前半生を送った。こうした経歴からすると、熊崎がいかなる形で占いに関心を寄せ、さらに宗教への移行にあたってどのような思想展開があり、それが前半生の活動とどう関連するのかという、〈断絶〉と〈連続〉に関心が持たれる。

こうした視点から研究を進めるうちに、以下のような問題系が視野に入ってきた。一、前半生での修養講演と開教後の教化活動に一貫する、人々の道徳的教導と国家への動員の傾向と、宗教化の関連。二、知の大衆化と立身出世主義の並存する大正期の能力開発実践の一つである速記術と、文字の神秘化である姓名学との関連。三、占いの教育機関であり、占い師の交流拠点でもあった五聖閣が、近代日本史の占いの歴史、とりわけ昭和期以降に果たした役割。四、通常非宗教とされる占いの「宗教」化から逆照射される、近代的「宗教」カテゴリー構築への介入と参与過程、等である。

今後我々はこれらの問題系を統合しつつ研究を進めるが、本論では先の関心に基づき、心會本庁における我々の独自調査により見出された熊崎の伝記や機関誌、著作などを元に、熊崎の人生史を記述した。これを通じて、今まで先行研究が全くなく、ほとんど知られていなかった熊崎の人生、特に伝記も確認されていない後半生も含めて、を当該期の社会的状況にも目配りしつつ明らかにすることができた。